

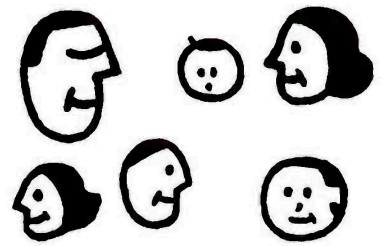
2018年の人口動態統計によると、日本における死亡数は前年より2万以上多い約136万人（うちがん死亡は約37万人）と戦後最多でした。一方、出生数は過去最少の約92万人で、死亡数から出生数を引いた自然減は44万超と、東京の町田市、長崎市、高松市などの中核都市が消滅した計算です。

日本人の死亡数は39年ごろにピークを迎え、今より30万人以上多い167万人に達する見込みです。団塊の世代が人生の幕を閉じる時期を迎えるためです。短期間でこれほど死亡数が増えるのは戦争などを除くと、世界的にも珍しい現象です。

数年前、「死を忘れた日本

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

会も減ったと思います。さて、多死化と少子化のなか、減少する労働力人口を補うには、働き方改革による労働生産性の向上の他に、高齢者の就労が必要です。

高齢者の体力や知力は20年前と比べて10歳も若返っているという調査結果もあります。日本人は高齢まで働く必要があり、働くことも可能だというわけです。

働く高齢者、「知ること」カギ

人」という本を出版したことがあります。死を忘れるどころか、日本は「多死社会」を迎えることになりました。ただ、1950年代には8割以上の人が自宅で亡くなってい

ましたが、今や、病院で亡くなる人が8割です。多死社会といっても、死が病院に隠されてしまい、そのリアリティが失われていると言えるでしょう。自分の死を考える機

%程度ですから、日本の高齢者がいかに働いているかが分かります。西欧社会と違って、若い移民を受け入れてこなかったことも高齢者が働かざるを得ない理由でしょう。

働く高齢者のがんが多発する「がん社会」が到来しています。この社会を生き抜くためのカギは、各自が「がんを知る」ことだと思えます。

(東京大学病院准教授)